花實義理記

四

へ遠13
665
8

遠門
號 665
巻 4

花実義經記

目録　四之巻

作者其磧

明治三十八年九月十一日購求
好文堂

はつ恋そめ実の義経吉野紙
若元七寺けうてん陰もぬ竹のこ
京うつの義用ちごゝろ
うめのみ掛さ山と火落

師匠の前でハ話合ふ恋よ小姓奉公
大かり袖とかり売よ来り志ん気の夜市
請人あしよ請とみさかれ無法坊
衆道のいきぢく御合ね僧の腕立
手池の御物三世の契る伏せ若衆
命すかへてかくまのて法師の色也へ
亭坊の留守よ寺の内と立り智恵
学問計ハ人の志らぬ稚児の隠里

古へ九郎殿志ん実に腰ひ志の紙
智恵ありとのみいはれしよのつねの事をとり
付とまつるハ志ろし剛強武勇智謀兼備の義経公を
源孫の九代もあらくしかてぞ兼るりてひなひとつ縦方九三郎も
らく霊し旅細工の下紙よ志てちひ却ちこらさと素へさとの僧し
おりとまつ公文濃面の籍検役や玄蕃りてをわつ孫の陵よたよひ
船中そ月とおそらくおかせしかく海とよのてうかりてくるさん
事ハ我手ら恵ちる事なりとハ称よりおかのむひ御様の宮の玄
三かくはいと為下され昭追の素まちり豆つきてれ玄錦の大衆よ
雨縁おれいまつひ手をなまつかとんれそくとよけの御かつよりくら山
花ゑりそ指よう御ゟ白雲共まおかろ善れ事も多んちか匠ちろうね

縁なれハ凡人をさし観音経をとなへけれバおもふをあらぬ事と分て
艶婦くも趣れぬさかん書籍ある弁茶と見えて亜と称号挿紙
是まい吉師の太刀よ此事ものありて毛も生きよ此つは田和の
此坊の名は如よしいかやうなる所縁ありて粉ふは云わる筆や朽子
見物せられ家ハ大勢の人をとまてぬ山道を引きわかつさんさら
色よう寄進ハ一人も趣は世々の荒法の方蒔師子對面して
揚子とかなるわれよう西の君を迎ひとり到し下さんよ庭の名を仮す
らまとよとひられい判官か事し石んおそふしく出かんとう荒法ハ
無縁師の蓋物様坊とて秘して海の東光坊の御ま知し附名とて
道具して秘かう前垂から時いろくのたりまし事てんやさくせ
法師なれハ世夜の雑義をかくてこそらく法師か女よ落書ん

見えひ人さといふきよひ立し事なるあるく気勢のつよきは法師なれ
ぞ定て其とかくかんとん面まとろあれハ武蔵坊さよつとして
猫乃君ハふよと事を係ら抄然と海よおかせし附さそうれ乃名
是まいあなりあまされきよりみまそ法蔵を引つまとそ手まへかかりさま
此まるぞの法子事よそのおのさうされハ大あの御四し世ちかひを附う
ハ我美お明今てうつぬうなせすよ衣男色よ法師か妻て服
あのころも素色の勢ひを集めせぬのとしらしころ和よそあり
いふ捨衣のよひ坊主されハとて今我未のわら男よるよせるまと
て文書とるひ法方よ夕飯一盃あそてかふかるまひまをせふぞさふ
来る事と大抵の寄て係られハ又恩案れひてやうもきふし等の
此雑所へあからうと仍ら番とてあなく宿定よ又大勢よ雑義盃

咽へも先へもまゐらねがよけれど身ひとつは大猫と龍がつかへしかれば利支
笑はせられて身が息も西塔まで走り入と女に言ひよりたまひ逢ふが
吾妻の形は出家と男にぬいでもいまじへの情とまれど血を
まけるより才たる程すてしたる命あの今は経が恋をうる般
法師むりにひぢいり身分を情まじくはふさへてもつ法
言ひまさると抑すれば身分なる様つくと教ひむりに書き出しつつまえ
それひとしてあのもつぱん作の子も賊がるれは除き身を経継
孤をさして今でも法師が国を受あひいつもと今のとまり参
君の流れのお額をまつかくかき寄さとまけ離縁を定めがたし
かの事わさいつまくらひ知られ山々やと法師が何
趣の命をも命まる六十まで大の法師筆をさしかる経とをい

て岩角れまつときもかぬがど山より剥れる足元までそ怪ぐとあへ
きき来まうを利支丹がひもりがくとよりせ動ひまで率忽れ動かず
ぐられ僧は南山の流法継猪師まで様様にてかくいやと仰られは
法師云とあの如く相馬伝は言たる様よそさうふがれ自分は雑まで
まうりはぞとみへんがほよろづめきもいにもを身と経めきもいは見
きうむもいはでとうりまうり参会へいかしへの海の東光坊丸とと見く知る
ぬらやきくかゝるうる牛若丸ともうろ見てそさうて本れ海ち遠
するくは身そう丹頂まはとわれはきさかと祈りぶづ相へて海山
の文殊とかめらうし牛若丸まで是ますまして知るもいかしへ乃
は心ざきみちがんしもが相撲に高蔵す小南山への備は千は祥鷹が子より
機にもまてまかうじきも旧国にかるへいうしへれ円き成程京

と称し一の祝宴やうう為傳るに南平ちこよりかひ（五つ）
男色のたくみをうけ南山の一老和義せうく楊川林泉
下の住まんをうけ志のびくよ出あひ〜と一きの耳よ入て二き
ゆ立接せうを為傳と源産の安倉よ和をかくされ〜を安倉よ
ぞんぜ和義よて一老のちへ為びへ抜林泉が称へ〜間と和髪を
そりおとし〜男ゆ〜て伽ゆ〜を抜傳がさとかくれ一山寄居
今五九為年サ文ケ条をよきて南山を今日迄ちをまり
ひきうるきみよりてこりけれ月へ今祝源氏の代とす〜ひ
大名とうて和よ廣くちうて〜ちるよう〜而りあるび〜ゆ
むう〜のうけとおとひ出ぜひたのこそ〜あられゃんあこな
この方とんぎ〜ふと為ぞ和義ちそ内よかくる事をもむとへよ

義を楊現の山へ合とあるられへ為傳が身れと牧へと小藤をかく
めゆうとんぎかうられで判官と源弁慶ゆ伽をうけ
ん南の的ちがひあこれをそこそこうる判官よ和義して
仕合れうへ対へ和よかぎうとうもうとうれ家強も南為
ちくかう〜まる武義伽ぎ為ぎ和〜れ抜よをく坪も傳よてうる
法師和義ちひ傳を為南ゆ〜ては雅ゆを銭ちれへうをを都へ
つう〜て雅美をうけんとをつと出傳へ南山をちう為ゆ和義
をたのまんとあよ和へなのぼうゆへをとのゆ〜ゆを為幸ひくれ
ゆ及びの為ゆ今祝へ源力師判官義経云とゆて日本国の
を為三千三ケ為へ牛傳のゆ〜為でをうゆ若元の為ひ山れ大傳
正よゆゆとゆみゆう野ゆ為ひえの山ゆとものをれ大地をへて

念ぜられん程に宝剣をやからく万石どうの大石を微塵にき
信の徳にて追付君を御下向あるべきさん僧ハ和尚ハ都へ
来りしを判官殿ハ山中まで御同道あらば馳走やせよの給ひ
と断崖さんがんに一振ゆらくと岩中へ飛おり逢まよふて立て
あまたゐるまねびて童のほとりによりつかれ貴僧にあやかる
独吉やともかくれバ法師も舞笠の舞をまはれ大きに悦び
ありけるがはじめのお庭ある人ハ一度に弟子とも出されハ弥猿をかい
といひけるを舞姿あらくしひとりそれ弥猿ハ此山で断の
ありやとよろしくりつさね
師匠の前へ揖合ある小性ぞ云
吉野の山ハまむし猿の神師ハおほせん三條ゟをひよ

やられし時利剣坊が若き光へ同ほんに今が稚猿のうきと弟まつむ静
けふ思召てハありしてやあきもの形のやうさと色世の事のせし八郷の蓋ハあかで
皆あふ蓋て今られぬ鬼げしき諸事ハ皆縁帽子をつきし上袖を弟
も郷も都をはなみなど依をとをまゐをひられ判官殿は山の岩へ
とつくして君よあれんとまくれをちからなく若滑あの霧石をよちぢ
のぼりて弟猿へ此何をも岩にまいらへ上る一匹を揉をうけ谷ゑをやうく
まふてもとのひ早をうかし息をつき秋気の岩へあまりて雨ハさきこそと
ひろとろづゆらきハ出役すて南山よりかれあいあるとくまりおれた
猿と弟あま猿へありや猿源氏を吉てりばいろくまそことなしさうつほさ
いれん綰くて天中くらうきあひかつて先ゑもそ皆つりきざあるさ
また今へと手飯あちとあまそうきて来りせうるあへ奥山よりほゝちろと初めて

ちの男のり出家立ち南山の新人の呼びて仏へまいらせんとおもはば
ものさうとゐねたれば第四の学生ここに年まそひめうん護衛あるものら
ゝとおもひてきあるかうの院に谷人解ぶまつり一夜も宿りたまを
あるよりはく京洛平城まふく学合わり山今日この外地
えがうはあくをを新人よりれ京中ものぶとうあるひまちぬ
四あるゝ下山ものさうべ。ほよ女中と共に乃松かるひゝ一もより上人
女人禁制のやそいらくゆりのへといはそくるひろ。お伝もを
をやてかとゐゝわきれてあるつぎ久。ここを山楽。京洛たが
山ものゝ一常をを女まゝとりてわらぶ智慧ふるき新来よもやはぬ
下山いるきれまゝ一夜をもむるとと護衛あるゝ山解あるとはこ
つるやれ来の山猟をよいたる女ゝるゝ方後とあるるれ。元寺のあるを

ものさうををれ山面参。仏ゝ参るとのとくあるゝ元ゝ
ふゝ女人禁制とゝあるそのべるひ私信乃をとあい
ものゝ用きいゝ年つれいをづるゐと中判して若元ものゝ
そるゝ面山よ女性ををとゝくれ出山ものれるゝ浮
乳房をを駆ゝふゝ新来れ信濃あるを元ゝ
ゝ新来いるゝとうゝ人患者ゝ家元の三業とゝ三人九月代を
判事をづるゐとをるれんやとゐるゝるとあもせをいゝ行ん
やとうゝ人新来ゝあ事をゝ尼ものれををあるを実酒
の中今一度ものよゝるゝ乃ゝ年ものゝ女の一分
ゝをれゝゝものをゝるゝひゝのせゝ女人とあれゝ出伝もを中
を抜ゝれ元ゝ伝ゝ。ゝを中判乃出。月代を行ゝ元

うつくしやうに美少人に仕立し忠信が稚指とさし出ありさまなり
をと男なれどもよく見へて山へとられしより此比は霜月廿六日老
僧主の好ひきもて京道にあつまるちて寺へかへりたりしに出
あひぬ法師正念つくしても花姿よ見とれ此山にとまりてあれかし
若衆お人は見まして若少性なれ由をしれは切米へ此を望み仕官
いかにもつかうまつらん具帳の方へとまをもしれば廻書方まんがちの学覚
此法師はあの廻書より出たるのわかる寺様まで出そらにかなって
俊覚もむら此方へ来てたのもしと袂をひけば後ろより大の法師とに
寺よあれ性まわ坊主なにかわ見へてたくみれのかれ面くら寺をふ小
性三人お前髪ぐらの小姓腹丸まで恥参来もろ猿のやうな男上
ぐわんをうめ法師我老花のやうなそうなるけば又我れからに縁を

ねかひの事あつておかげかくしに我が櫓門の禅師学林とて学力は
すぐれた力は一山にならぶものなしに愚僧の方へ来られしは
おれ坊主は又抱をさしはさむ事なるおもひといふさに方でこしろ
抱かしてもさいはひまきそゆめんどうなる老僧に何とぞして卯
寝をもあらせよ此密蔵の随分とりげにおもしは縁なきさうなるとて
京まへから此様者来よう方へ此まま寺まゐらせつかはしめし和子は元来
南山の稚児本庵のものあれば一あつも南都に還俗仕りたちて住
の和子を御とひとうらまし此の間まへ此義は小人の是にて存ぜつまう
まさとし方へつかはしけれども縁は坐骨と見わけして強義
わかされ下されましとまうしかぞうしろへ来かてそよれば仕まま
てよ〓ゆくとせうとしくに利の相続とまんとしつ若衆は来ちち

此あたり寺院（じゐん）あまたありける中にいづれかの男が住
寺宮（きく）の縁深寺（えんしんじ）といふにて南山寺にかのそのほか念前（きんぜん）
此山は千付（ちかづき）とて色わかき寺の宝がおほく又子どもも十人も
秘方とかすと七なひとつ貝が幸便（かひぜん）まちをして世にめくり
ある寺へ参く此少人は親（せきじん）もろともにせて月の出るを酒宴（さけで）してあそぶ
存し遠（えん）国（ごく）より三人ありは此方へ参りて無縁（じ）は川瀬（くわいらう）法師と
以子桃代（しゆざうざい）とつともうとの寺内（じない）にあまりもあればいつも此道筋（どうちう）
ありてもふ自由（じゆう）なやうにさせましさぞこそ又来れと聴（わぐ）にさゆれ
此患（さくの）僅（び）よき法なして仕合（しあはせ）にあらばなれしよまつせんと志づかを
さざきてそ川くら法眼（ちやうげん）の寺へいくなをさきまつる家に探光（さうりと）の寓様（かうさい）
法師とて年ぶる美僧（びさう）の其ての静（しづか）に姿（すがた）をみる教（きやう）しようら究（きう）よ

あくがれ勤行（ごんぎやう）学問（がくもん）の事は世の外まつ男ともさき小川の法眼の
許（もと）へ日に二三度宛（づつ）参り香（きこ）を見て志づかに経（きやう）を身て一いよくんを
立やましそうがいそそくさひ顔君はれは我世すらき目を添り
一夜の情（なさけ）をあつからと菊桃（きき）をとりてさずやと独（ひとり）ときにめて存ぶ
をみめさき行けるに奥（おく）は川くると学規（がくき）と有教（けうしやう）よ外く志を口（こう）
偏（へん）ひろき衛文（つゝそ）のつけよ立京てゆくに学規（がくき）が意（よし）まで年法松まなれ
法眼（かげん）は仕放（しほう）宝福（さいよ）われが少人（せうじん）は無量（くわう）が前子勉（え）んと手をとりて縮来（づき）
せしあれは此学規が光鍋（えんでう）あれは此方へ居る今つきそ游びさあおかくは京
まれよと今へをひてく斗ふのてあれは、むさいうの事をいふ少人は京
みくやまらの小をそらかすものとかくあれば山積（まなか）の傷子（わつて）とも志しせ
てみとらいつきの傷へ如とも生云て申してうしまぜと男色（なんしよく）の三ちそ

まるも甚しき実にびんさよう事はかりしが南流にも別でこれへとてき
ゆくまじきといふよりも我らは死なもれと愚僧があしかくへさうが
義経の色もやはり弁慶にまさあらそふれば法師の縁ざめさひしくれ
御の小性ぎさうあてやうれなよあざまらそていひ入れば、らく是れば弁
へ大事いるれぬるか府乃武乃の花よの人は当家にて、もちまぬるひ食
識はせぬ不動の利剱の切先そて清盛へさぞと思し眼なる
つらく悪敷ぬ右うくくとふきちりて渡のうち家臣どもを立遁じ
てかくある体ひざんつのくは将軍と首尾よくかまじささのおて道
さあの時ななとや老人を生そ天せくまじ。わそつ花もちらしうぞれ
我も目をもかまふまじ。又ふびんするやうにても我れは縁とぞ法師を
耳より入は弁慶そ主のゝちろか、さすくの我身をかゝりて命をもたとけ

てもろ是也とてつくの種をあけて君が為にあつかり山賊の大閣
まづしまらふ。らふすらどいひかせんとふう引ぬろうかれた。お佐もれ三百も
君れはかられがと申すか、まうちて奉ふおゝされはみを多義経へうの
人今のてくいそれは法眼をうつくむさへは我をつまとめんもそうのかくに。
あなる時まへいはくをへさと身をまかりてぬつるを宿根見えてさうのひ
あられながら人は我身へ迎来りまた人は法師が一命そうろくたそ者さん命は
数なく手をらせん人さいはひのうち義経も表るまな注事あって迎対一山が
思けるは弁慶まてそよきさするれぬけて来りある人べし。我慶は色が三郷
あ唐門作りよ勅子すま牡丹の彫ものあり。道へ入て左の方に物をも除れ
そこるわり是愚僧が主文所まそ誰人を来ねぬするれはまきせすしい
弁慶よ暮ひぬしも是也と、委細よ存じて侮るもしろう

弟子は親の一世師弟は三世と契る仰せあれ
かくて此筆の冥加につきはせず川勝は眼色衣を着し本書より紅
をつけて出るまじければとつくり一すぢは申すよりはつけ出て宿坊
は師が寺へ預けさせ其後は天のかうをかけて学文所へ参びのさ
ましく継ぎはあれど住持訪ねの者あらうさしやすへ参りては当年
十歳へ参りますにつ入門入れ小者に金銀をまゐらせしれて一山寺
ぬば芝ほどとれは出るかひもありしがまでらぬ夜はかぶれて入しも
と書物学問の書物を添へて呼出す筋ありとて入りしにちんを
の内へもなき内もあつて息もせずに思ひも寄らず事もなく
庭へ出て人縁にあらぬく学文所の障子をあけて内へ入り
手習のよく学ぶよりは早地をかく習ひして学びつけ

ずにあらむ者ぞとく修行せよかりとどかせずんば本地を探へんと
へ入り弟子せんと何にもかくて筆をとれば書をかやと両袖を取よと
めて書まゐらんと書くまゝの筆を手にとりて習ひ筆を走らす事かなく
学文所よりにて送り我が寺へ一冊も見せられぬ程につまと咎めず
いさましく手習の事よりは物かいてはもちろんは機嫌をよく宿坊
師匠はさいさおかちかと縁起を語りまはせ弟子と継ぎとればかくる
者なしへ入りやと親にも有りて刹那まじきをまれまじき事は大事さるべ
所は上つかず弟は毛ほどもかかれまいとかそれにきていたはず一筋色
さつくのはにまとりて声よりもかくも心得ありとも其にも早くせ
のさとは世まで其の後息災なる身のほど見えてくれしは本に別にさら
そと気つけてあさくされは義経も親とあつまりてひ我は不孝者[illegible]

よのなかはそもそもてらどいふものをたてはじめてたんと
月代そりあたまつてゐるせてろうにんてすれ髪まあ
とりしてをんなどもよ酒もへいく武ら屋敷をもうけるうらを
酒とうたをうたうくさくもりとおもわるもちろんもの屋
のいひまけあれ武ひとりやとそもに実入いひまつ・なんぢたと
ゑ眞ゑ物ゑ屋ゑ雪ゑ花ゑ鳥ゑ風ゑ月ゑ雪ゑ花ゑ鳥ゑ風ゑ月ゑ
つてくびとくいに員ゑかくんあるとうりて酒とうへくいにまうづき事
んあるとうびんと光つあれるのいはゑ幸抱ちうとうのやとうるこ言
いそそそへそれそへそけ今武でもゆくいはまでそうくふとうえるつい
てうれたれ新あるもまとがみうくれあばくわるというねれと推すれ
ゆうへ酒ゑ三番ゑ雅宴ゑ歌ゑ遠

ゑ絹ゑ手ゑ指ゑ足ゑ目ゑ鼻ゑ口ゑ耳ゑ髪ゑ顔ゑ首ゑ肩ゑ胸ゑ腹ゑ腰ゑ尻ゑ
あびかるやとれるるあれいちまで川ゑ屋ゑ眼ゑ方ゑ高ゑ月ゑ
三人ゑよりくまれわるせくいたゑ実のゑへとんて学ゑ花ゑと
せうあひれ見ゑよりまあびしゑ武ゑまの宴ゑ酒ゑとうくれ信ゑそう
ゑれしこのうくれば和まくゑのびまとしとのそくんをうづくと
ひ学ゑうゑ花ゑかくくとうれあゑまゑの表ゑれゑを知ゑるくんゑ眼ゑくくひ学ゑ
まのてとくくとのうれあゑの酒ゑと人ゑ武ゑのこひくゑるくくゑ
まてけまるゑあるまびまくまるとゑ武ゑ毒ゑ三ゑのうづくこそゑばつほと
うひうれいそれゑ南ゑようのそせくゆうれ武ゑ師ゑ追ゑ殺ゑせくれうゑむ木
のうゑ木ゑれまくゑんゑ花ゑと七ゑ歩ゑうくれうゑ有ゑ時ゑ法ゑ師ゑ式
雅宴ゑの雅ゑとんてゑもゑてゑ人ゑうくゑれゑ方ゑとんゑ信ゑうれゑ方ゑゑもゑゑくゑ

人とのたまへるを、おんなとあり、始めの物よとかたらんに、
相ぬりのたびうち新参まで、
数をつくしまひうさうなり、
若たうちんさんの家へのぞいらん山下れ富士とりて、
まかく家よりかたりの相ぬり山ゝ女人歩行ちんべをらづ者の事ゆ
あけていひうて我れをもつけ通りあうくうひしゆ性ぬが
かく流浪の身よりあるべきかうるくあてゝ人ちゝあけ山ゝ
さんと参りしゆ主人の源つきどつぐうあひあうと亭坊へ
ひとうんそらとうけとえまうかゝあなの中推中ゝ
よいゝ相つぬ芸者とゆまぐうるえゝ也おきかゝゆ秋ゝて
高野法師次まゆて言葉ゆ新参とゆ人ひまぐき

神ゆ人落て参りの人ゝ二人れ人ゝひ合の女ぐゝやうゆ
ぐ相ぬりの中ゝれゆ相ゆ主人の源つきと再ゝ
七孫まるれつゝて今月法華ゝもち侍とゆ国ゝ全く法華ゆ
らど実ゝ半ゝとゝ侍ゝ国ゝ侍ゝ一山大講
芸ゝ元禄ゝ七先富山ゝかくゝゝやのゝと法ゝとうとゝ
の元法ゝ改ゝ山ゆ相ゆ寺ゝと証ゆ山ゝうゝ寺ゝあれゝと
てゝ二月南ゆとゝかくゝゝ寺ゝもゆゝゝゝ子細ゝ山七方ゝゆ
国ゝとゝ人ゝて無侍ゝ方ゝ美ゝとゝけ打ゆの鞠ゝとゝゝ大鼻ゝと
焼ゝくゝ侍ゝのゝれ神ゝく相美ゝうゝてゝものゝきゝゝ始ゝ侍ゝ光
と相ゝくゝまゝゝゝゝとゝのゝゝゝゝゝかゝゝうゝの始ゝ侍ゝ
てゝ法ゝうゝと寺ゝ山一人ゝ寺ゝ相ゝゝゝゝゝゝゝ

おつされて面あるよものびまゝ〜まさりとて美面と寄う人も他
ひげをべ〜きとうまんそらうとくをそ〜ゆきんとあれて判
皮をのかるゝどよろこびさあひ和れよ〜まもられるさ有とは
まそひの陰生ろ乃は夏わとかうひ義強腎病ふてかひ
るさ二命をあ〜むるあ〜ひいうあを〜七は地とのがま〜乗るさ
和を後言せ〜根系あるよれやつかうは〜さいく暑りな
き有れのひひうきとのてとを命夫事まあろ四人あひあうこう
きう信まそは若男をうけ〜と愛命の須とあるうれ〜ばきつを
ちを洞ぐう〜板ひい面よあきてう白牡丹の白ひとくむま
きいうう〜と宮痕は風情よりく思ひまてやかさをふ
義強を須の方人まうき〜を事あう〜先須あの

ち人の湯を見そあ〜ちうまう〜切よありひちそ所時わ
まるひまをうきあるよ兵今原れいをそのはを後とを見見
は面とあうふおとひをうあ人有家の和らとさいせんちあ後
面皮ふとうは皮とれとひひむとび〜業周やんはうるこひ
ちをもどひひ世いをそをきを事をあ乃あ桃とをうあまを
一和れ由る〜あつく仮のまう〜をりいうは〜びたあ〜浪う
るさは家志るうんとかをで〜をを〜金義ふくかちうのあろ
まい判皮をあものざるう〜と後程あまふうをせれおりひの
をるあうれちを指ゆべ〜とうけ合ゆへ家は法師まを合を
て判皮を指を面ひ世家ふ保とあひ事高四へをまべ〜を
うれ〜しく〜むう〜あう業へいをげとり事わるれは今

宵蘭亀をうのミ入とうろこび郭ぐ入るれい判あい
あゝれそそぐ〜こゝぢあ〜ぞと十蓋盤出して
見一ぐまろてをまるれぬちづぐ廊乃
巽月

炬文堂

新寄雅紀四巻終